

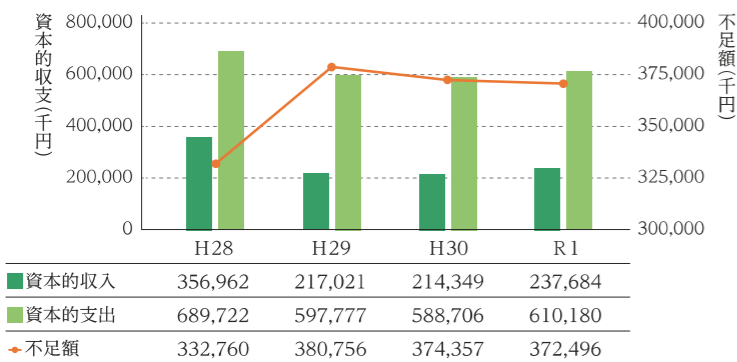
巻頭「水道の現状と課題を知ろう」Vol.4



令和3年1月号から、「水道の現状と課題」を連載してきました。
7・8月号では、拡大版をお届けします。

市の現状を知り、安全・安心な水道を維持していけるよう、
皆さんで考えていきましょう。

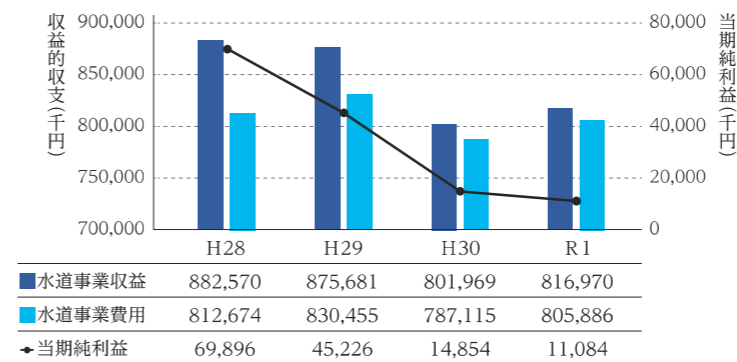
図2 資本的収支と不足額



当期純利益と内部留保資金の推移
企業債残高を減らすために企業債借入を抑制すると収入が減少するため、資本的収支の不足額が増加し、その額は毎年3億円以上に上ります。この資本的収支の不足額は、内部留保資金で補てんします。(図2参照)

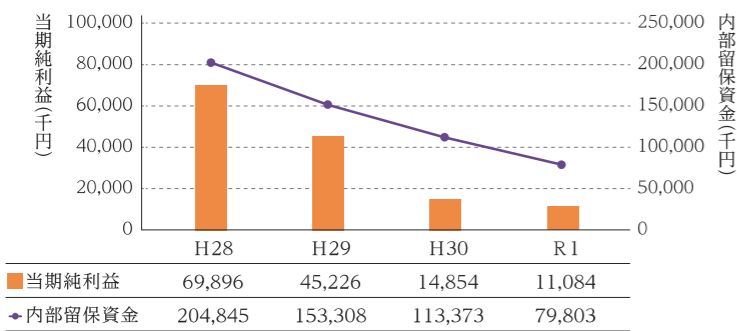
収益的収支で当期純利益が減少することで、内部留保資金へ繰り入れられる資金も減少します。

図1 収益的収支と当期純利益



収益的収支と当期純利益の推移
直近4年間の水道事業収益と費用は減少傾向にあります。費用より収益の減少の額が大きいため、当期純利益も年々減少しています。収益減少の主な要因は、給水収益と他会計補助金の減少によるものです。費用増加の主な要因は、漏水修繕などの修繕費、また、これまでの施設整備にかかる減価償却費の増加によるものです。

図3 当期純利益と内部留保資金



令和元年度は、収益・費用とも前年度から増加しています。費用の増加で増えた赤字を補てんするため、一般会計から繰り入れる補助金が増加したことによるものです。(図1参照)

資本的収支と不足額の推移
平成28・29年度を比較すると資本的収入と支出は減少していますが、支出より収入の減少の額が大きいため、不足額が増加しています。それ以降は横ばいの傾向にあるため、不足額も横ばいが続きます。

収入の多くは企業債借入です。平成29年度に事業を抑制したことに伴い、企業債借入も抑制したことで、収入は減少しています。それ以降も継続して抑制しているため、資本的収入も横ばいが続きます。

支出は、施設の更新や管路の拡張改良工事などの建設改良費と企業債償還金です。平成29年度に建設改良費が減少したことと支出は減少しています。それ以降は建設改良費・企業債償還金ともに横ばいであるため、資本的支出も横ばいが続きます。

また、資本的収支の不足を補てんする額が収益的収支から繰り入れられる額を大きく上回るため、内部留保資金も年々減少しています。

内部留保資金は施設整備の費用や、これまでに行った施設整備のために借り入れた元金返済の財源として使われます。今後多くの水道施設が更新時期を迎えるため、将来に向けて内部留保資金を蓄えておく必要があります。(図3参照)

水道のよくある質問

Q 水道料金はなぜ2カ月に1回の請求なのですか

A 水道料金を計算し、また漏水などをチェックするためのメーター検針、およびこれに基づく料金の請求には、1回ごとに人件費や郵送料などの経費がかかります。検針回数を2カ月に1回とすることにより、経費を節減することができます。

Q 水道水がぬるくなるときがあるのはなぜですか

A 夏場の暑い時期は、熱により水道管が温められ、水がぬるくなることがあります。浄水場から離れるほど、水が滞留するほどその傾向が強くなります。蛇口から水を一定時間流し、水が循環すると解消されることがあります。末端の場合は水の動きが鈍いため、解消されるまで時間はかかりますが、水質に問題はありません。

〒上下水道課
☎058-323-7760

Q 検針票(水道・下水道使用水量と料金のお知らせ)について教えてください

A 検針票(水道・下水道使用水量と料金のお知らせ)には使用した水量や請求金額が記載されています。口座振替の人には検針票に口座振替のお知らせも掲載しています。また、漏水している可能性がある場合や、以前に比べて使用水量が多いなどの場合は、検針時にお知らせしています。

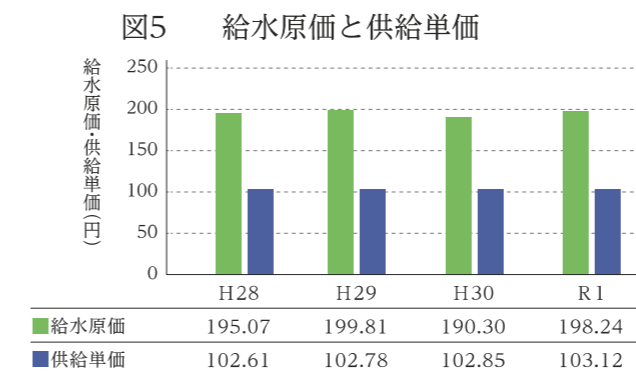
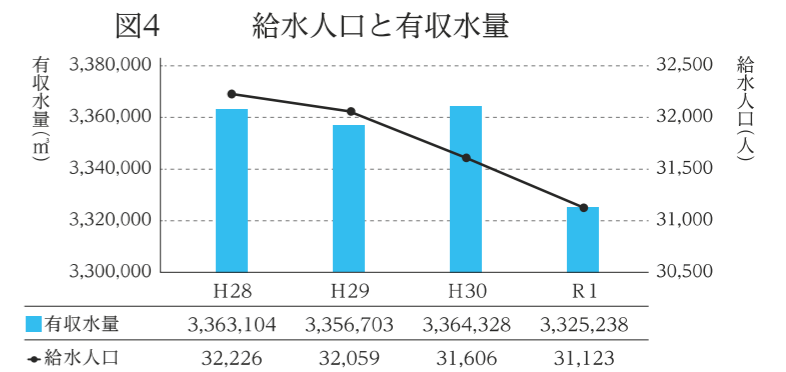
Q 道路が濡れているなど、漏水を発見したらどうしたらいいですか

A 次のような状況を発見した場合は、下記まで通報をお願いします。
▷晴れた日で、いつも乾いている道路に水が染み出している。
▷道路上の水道管の円形弁蓋、消火栓の蓋から水が溢れ出ている。
※通報の際は、現地の住所や目印となる建物など、漏水場所の詳細を教えてください。



給水人口と有収水量の推移
給水人口とは、給水区域内で給水を受けている人口のことです。直近4年間の給水人口は年々減少傾向にあります。全国的に人口減少社会であり、市の行政区内人口も同様に減少が予想されるため、今後も給水人口の減少傾向が続くと考えられます。
有収水量とは、供給した給水量のうち、料金収入となった水量のことです。有収水量も給水人口の減少に伴い減少が予想され、更には、近年の長引く景気の低迷、節水機器の普及により今後この傾向が続くものと考えられます。(図4参照)

給水原価と供給単価の推移
給水原価は、有収水量1立米あたりにかかった費用のことです。製造単価を表します。
供給単価は、有収水量1立米あたりに得られた収益のことです。水の販売単価を表します。
グラフで給水原価と供給単価を比較すると、給水原価が供給単価を大きく上回り、給水原価、供給単価ともに直近4年間で横ばい



この状況が続きます。給水原価は水の製造に必要な固定費であるため、今後も横ばいとなることが予想されます。
公営企業会計の原則である独立採算の観点からすると、供給単価が給水原価を上回っていると必要があるといえ、供給単価を引き上げる対策が必要です。費用を収益で賄うことができると、減少傾向にある給水収益も上昇し、当期純利益を確保でき、内部留保資金を蓄えておくことができます。(図5参照)